

# 教師夏目金之助の研究（十）

## —小宮豊隆との師弟関係—

森 下 恭 光

### 緒 言

本論においては、夏目の評伝としては古典と目され、夏目に関する研究を志す者にとって必読の書とされる『夏目漱石』の著者である小宮と夏目の師弟関係について、次の点を明らかにすることを企図する。

まず、夏目と小宮の師弟関係は、何時、どのような形で始まったか。次に、その師弟関係の展開はどのように進化したか。そして、夏目と小宮の師弟関係に他の門下生との場合に比べて特質があるとすれば、どの点にそれがあるか。以上のことを、夏目の著作、小宮の著作、夏目と小宮の師弟関係に触れる他者による著作など、広く資料を求めて明らかにして行くことを企図し、論究を進めて行く。

—

小宮豊隆（明治十七—昭和四十一年）と夏目金之助との出会いは、小宮自身の述懐によれば次のように始まった。

「私の従兄がロンドンで先生と暫く一緒の下宿にいたという縁故で、前から紹介してやろうやろうというのを、大学に這入ってからの事にすると行って延ばしていた私は、9月にいよいよ大学に這入る事になったので、先づ従兄に先触をして置いてもらった上で、先生の手塚の家へ罷り出た。<sup>(1)</sup>」この時、（明治三十八年九月）小宮は、福岡より上京し、東京帝国大学独文科に入学しており、在学中の保証人になってもらうため、本郷区駒込千駄木57番地に夏目の自宅を訪問した。このことによって明らかなように、夏目と小宮の出会いには偶然によるものである。

前篇で論じた森田草平が夏目に出会ったのは、森田が夏目の勤務する第一高等学校、東京帝国大学英文科の学生であったことによって始まっていることと比較すると、そのことは明白である。ところで、小宮を夏目に紹介した従兄というのは、犬塚武夫を指す<sup>(2)</sup>。この犬塚武夫は、夏目がロンドンに留学中、その下宿（81 The Chase Clapham Common<sup>(3)</sup>）で同宿したことが縁で、当時、神経衰弱状態にあったといわれる夏目を自転車の稽古に引っぱり出したのだという<sup>(4)</sup>。このことは、夏目自身が明治三十六年六月に『ホトトギス』に発表した『自転車日記<sup>(5)</sup>』に記されている。

夏目は、ロンドン留学中に偶然下宿を同じくし、その折に自転車の稽古を共にしたという犬塚という人物が紹介する小宮に自宅で面会し、保証人になることを承諾したわけである。出会いの始まりは、このような偶然で始まることが多いとはいえ、このばあい、夏目の好意がなければ起こり得なかったことであるといえよう。

この時の夏目の印象を小宮は「その時先生からどんな話を聞いたか、こっちからどんな話をしたか、そんな事は、今一切覚えていない。<sup>(6)</sup>」と記す。その上で、「先生の中からだつき全体がなんとなく嬾そうに見えた事と、それにも拘らず先生の眼が爛爛と光っているように感じられた<sup>(7)</sup>」と独特の雰囲気感を漂わせていたことをあげている。このような印象を与えたこの当時、夏目は、精神面において、帰国した明治三十六年以來つづいている神経衰弱が一進一退の状態にあった。しかし、一方で創作意欲はきわめて旺盛で、一月より『ホトトギス』に発表した『吾輩は猫である』を第1から第6まで発表し、その他に『倫敦塔』、『幻影の楯』、『琴のそら音』などを相次いで発表している。

また、東京帝国大学では、明治三十六年より開講の『文学論』を明治三十八年六月に講了し、九月より『十八世紀英文学<sup>(8)</sup>』を開講している。

ここにあげたような夏目の当時の状況を考えると、小宮が夏目から受けた印象の中、「眼が爛爛と光っているように感じられた」という部分は、暗示的である。

このような経緯により夏目の面識を得た小宮は、独文科の学生であるにもかかわらず、夏目の講義「十八世紀英文学」とシェイクスピアの購読には欠かさず出席した<sup>(9)</sup>。しかし、小宮が夏目にそのように関心を持ち、他学科の講義であっても、それを夏目が担当しているという理由だけで受講しても、夏目により早い時期から接している寺田寅彦や森田草平に比較すると、その師弟関係の濃密さは、急には進展しなかった。この時期、どれ程の頻度で小宮が夏目に接近したかについては、小宮自身によって明らかにされているものもなく、間接的に証明するものもない。

師弟関係の進展が伺われる資料としては、書簡の往還が有力なものとしてあげられる。そこで、小宮が夏目から受けた書簡を調べると、その最初のものとしては、明治三十九年七月十八日に千駄木の自宅より小宮の帰省先の福岡県京都郡犀川村に宛てた書簡がある。

「御手紙拝見川へ行って鮎をとるのは面白いだろう僕も随行の榮を得たい。<sup>(10)</sup>」で始まるこの書簡には、「文章もかき上げると愉快だがかいているうちは苦しいものだ。<sup>(11)</sup>」、「来月は講義をか、なければならん。講義を作るのは死ぬよりいやだそれを考えると大学は辞職仕りたい。<sup>(12)</sup>」などとやゝ誇張は見られるもの、本音ともとれる告白調の内容が含まれている。夏目の書簡に見られる1つの特色に、友人や門下生といった利害得失に関係がなく、夏目自身が開放的気分で書信を発する時、このように、やゝ誇張をしながら、本音を漏らしたり、暗示を与える形で内容を構成するという傾向がある。したがって、こゝに見られるような文体ないし内容は、小宮に対して認められたものに限らない。しかし、小宮という存在が、夏目の中で、開放的気分で書信を送って差支えない存在であることが、この時点で認められているということは疑えない。

夏目の書簡の特色を後にその書簡集を編集した立場で小宮は次のようにとらえている。「書簡は、漱石の殆んど全時期に互る、内面生活の表現である<sup>(13)</sup>」、「殊に、日常生活に於いて、向き合って坐っていて、そのままで腹の中がはっきり透いて見えるような、透明な相手を愛していた漱石は、書簡で自分の腹の中の事を、些しも隠し立てする事がなかった<sup>(14)</sup>」「書簡ほど漱石を、漱石のままに表現しているものはない。<sup>(15)</sup>」これらの特色は、自分自身に宛てられたものを含めての指摘であるから実感的なものである。

したがって、小宮が夏目より最初に受信した書簡も当然そのようなものとして小宮自身

によって意義づけられているはずである。

さて、小宮が夏目の第一信を受け取った明治39年の7月頃における夏目の状況はいかなるものであったかを次に見ることにする。

まず、前年より発表し始めた『吾輩は猫である』を4月の時点で「第10」までと『坊ちゃん』を発表。作品集（七篇を収録）『様虚集』を5月に大倉書店より刊行している。

一方、職場の東京帝国大学英文科では、前年九月より開講の「十八世紀英文学」は週三時間、この年も継続している。しかし、教授会とのトラブルが発生し、二月、大学から英語学試験委員を委嘱されたにもかかわらず、これを辞退。このことにより、講義における学生との関係は、受講者も多く良好であった<sup>(16)</sup>のに対し、教授会に代表される大学側との人間関係には苦悩していたことが分かる。

また、家庭においては、前年の十二月に四女の愛子が誕生するという慶事があった。

小宮が夏目より受け取った第二信は、八月十日付けのはがきである。千駄木の自宅より小宮の帰省先（前出）に宛てた便りの内容は次の通りである。

「先達は手紙ありがとうございます。牛の胃袋の話をご三行かりました。九日迄連日執筆この両三日休養夫から講義をかく。人生多忙。<sup>(17)</sup>」以上がその全文である。

この書簡の内容から推察できることは、小宮は帰省先から前便に次いで夏目に書簡を送り（長短は不明）、その中に牛の胃袋に関するものがあったということである。「9日まで連日執筆」とあるのは、この時期に執筆していた『草枕』を指すもので、「牛の胃袋の話をご三行かりました」は、後に小宮が全集の注解で解説するところ<sup>(18)</sup>では『草枕』の中で茶店の客が交わす会話の中に人間にも牛のように胃袋が2つあれば1つを切っても一方が残るからいいのだが、という趣旨の会話<sup>(19)</sup>がそれにあたるとしている。「講義をかく」は、9月から始まる「十八世紀英文学」の講義ノートのことであろう。

夏目からの第三信は八月二十八日付けのものである。やはり帰省先に宛てられた手紙である。前の2つに比べ、今回のものは、一段と寛いだ感じを漂わせている。まず、冒頭に学生が送ってくれたという大坂の新聞に掲載された漫画（漱石の顔をした猫の下に吾輩ハ猫デアルと書かれている。）が添えられている。

後につづく文面では、夏にもかかわらず毎日来客が絶えず、昼寝もできないこと。講義ノートが全然書けないこと。十月一日発行の「中央公論」に小説を書く約束があること。諸事に追われ進退に窮していること。講義の開始は遅れそうなので、九月の十五日以後二十日以内を目途に上京されたらよいこと。さらに、これらの内容につづけて、『吾輩は猫である』について小宮が批評したことについての御礼ととくに主人公公苦沙弥とその友人迷亭との比較については同感の意を表している。その他、九月一日発行の「新小説」に『草枕』を発表したことを記し、それが今迄に類のない小説であることを紹介している。比較的長いこの手紙の内容は主として以上のようなものである<sup>(20)</sup>。

ところで、この手紙で注目されるものに、差出人の署名が、「なつめ金」となっており宛名が「小宮豊隆先生」という点がある。このことによっても両者の師弟関係がその親密度を高めていることが察しられる。しかもそれが第一信を受けてから1月余りの短期間における進展であることを考えるならば、その速さには驚かざるを得ない。

さて、この後の夏目関連の事項を次にあげておく。九月には、夏目が小宮に宛てた書簡

に記したとおり『草枕』が「新小説」に発表される。発売は八月二十七日で二十九日には売切れたという<sup>(21)</sup>。九月十六日、夏目の義父中根重一が死去。享年五十六歳であった。夏目は事情により葬儀には出席しなかったが、遺族に宛てては長文の手紙を認めたという<sup>(22)</sup>。

十月、『二百十日』を「中央公論」に発表。秋頃より明治三十六年九月より開講し、明治三十八年6月に講了した『文学論』を出版する準備にかかる。整理は学生として『文学論』の講義を受講し、明治三十九年に優秀な成績で卒業した中川芳太郎に委嘱した。その理由は、明治三十九年十一月に夏目が認めた『文学論』の「序」によれば、「中川氏は此講義のある部分に出席したる上、博洽の学と篤実の質をかねたれば、余の知人中にて、かゝる事を処理するに於て尤も適當の人なり。<sup>(23)</sup>」と夏目が当時最もその学識を認める門下生であったからである。

## 二

以上のように、職場において、作家として、家庭人として、また、社会人として多忙を極めることになっていた夏目の事情を察した門下生の鈴木三重吉の発案で、十月十一日（木曜日）以後、面会日を毎週木曜日午後三時以後と定めた。このことは、十月八日付けで夏目が、木曜の午後3時からを面会日と定めた旨を寺田寅彦、高浜清、野村伝四、栗原元吉、野間眞綱<sup>(24)</sup>に宛て、それぞれに通知の書簡を送っていることで確認できる。ただし、森田、小宮、鈴木（三重吉）に対しては、この時点では通知の書簡を送っていない。木曜会の初回にあたる十月十一日に集まったのは誰で、何名に達したかは明確ではなく、夏目夫人の述懐によっても、それは明確ではない<sup>(25)</sup>。小宮自身も自分が何時から参加したかを明らかにしていない。

木曜会が設けられるようになった理由には、夏目自身の性向もあげられるとして、小宮は、「地位だの名声だのではなく、純粹に「人」だけを愛し愛される事を欲した漱石は、地位も名声も問題にしない、純粹に漱石の「人」だけを慕って来る客を喜び<sup>(26)</sup>」、迎えたその性向をとらえている。その結果が、応接に暇が無くなる事態を招くことになったというわけである。このようにして決まった木曜会の午後三時以後の面接日ではあったが、「初めの内は、木曜にも人が来れば、外の日にも人が来るという風に、ある意味では漱石は束縛を1つ余計につくったような結果を持たなければならなかった<sup>(27)</sup>」と小宮は開設当時の状況を記している。

この後、上京後の小宮が夏目より受けた書簡は十一月九日付のものである。夏目は千駄木の自宅より、本郷区森川町一小吉館に住む小宮に宛て、送っている。因みに十一月九日は金曜日であるから、前日に木曜会が催されている。手紙は次のように始まる。「今日は長い手紙をかゝなければならぬ日で四五本かくと一寸一仕事だが返事をよこせというから上げる。昨日は（筆者注、木曜会当日）客に接する事十三四人一寸驚ろいた。然し知った人があゝ云う風に寄ってみんなが遠慮なく話しをするのを聞いている程な愉快はない。僕は木曜日を集会日と定めたのをいゝ事と思う。<sup>(28)</sup>」とあることによって、まず、木曜会の規模がどの程度のものが推測できる。しかも、木曜会で多人数の来客に接した翌日に長い手紙を四五本書こうとしていることで、夏目が手紙を書くということに大きな負担を感

じる人間でないことがうかがえる。もっとも、この日夏目が書いた手紙は、全集に掲載されているものに限ると小宮宛のものと高浜清宛のものを合わせて2通である。

さて、手紙は次のようにつづく。「君は一人でだまっている。だまっても、しゃべっても同じ事だが、心に窮屈な所があってはつまらない。平気にならなければいけない。うちへ来る人は皆恐ろしい人じゃない。君の方でだまってるから口を利かないのだ。二三度顔を合せればすぐ話が出る。<sup>(29)</sup>」この部分を読み気付かされるのは、夏目が十三、四人を相手に応対しながら、この時点では特別の存在ではなかったはずの小宮の様子をよく観察していたということである。同時に十三、四人を相手にしたということではなかったにしても相当数の者が周囲にいる中で夏目の視線は、おそらく満遍なく向けられていたであろうことが推測される。さて、手紙のつづきに、「中川という人はやさしい人であるが三重吉は御仰の通中々猛烈な所がある。あの兩人は親友である。色の白い顔は東洋城という俳句家である。あれもあれぎりの好人物である。也ピロ連は尤も大人しい連中でちっとも気兼ねをする男じゃない。<sup>(30)</sup>」とあるが、こゝで夏目は当日の客の数名に対して人物評を加えている。いずれも好意的である。「中川」とあるのは、中川芳太郎で英文科の卒業生であり、夏目が『文学論』の整理を委嘱した人である。「三重吉」とあるのは、鈴木三重吉である。彼は、この時点で既に作品『千鳥』を夏目の推薦により明治三十九年五月、『ホトトギス』に発表し、文壇に登場していた。鈴木が英文科に入学したのは明治三十七年で、小宮が独文科に入学するより一年早く、夏目に接するの一年早い。加えて、彼は、明治三十八年九月十一日に、中川を介して、長文の手紙を夏目に送っている。その長さを夏目は「念の為め尺を計って見たら八畳の座敷を縦にぶっこぬいて六畳の座敷を優に横断したのは長いものだ。<sup>(31)</sup>」この長文の手紙は夏目への敬慕の念をひたすら綴ったものであり、夏目を感激させたものであった。そのような経歴を持つ鈴木であって見れば、際立って強い印象を後参の小宮に与えたのは当然であろう。「東洋城」とあるのは、松根東洋城(本名豊次郎)で、卒業したのは京都帝大であるが、夏目には愛媛尋常中学時代に師事した。この松根について、森田は「上品で、落ち着いた、どこか貴族的風采を備えた人」と評している。「也ピロ連」とあるのは、複数になるので特定はできない。森田によれば、「野間、皆川といったような先輩格の人々<sup>(32)</sup>」を指す。野間真綱、皆川正禧等がそれに当たるといことになる。

夏目の人物評がすべて好意的であるのは、いうまでもなく、木曜会の参加者が夏目に対して敬意と思慕の念を持って集まっている者であることに起因している。しかし、夏目と参会者の関係はそうであっても、参会者同志の関係がそうであるということにはならない。小宮が初参加であるとすれば、夏目としては、小宮自身が参会者との関係を築いていく資料として参会者の人物評をして見せたということであろう。夏目はこの書簡の末尾に、自信を持って人に接することの必要性を自己の体験から言えることとして小宮に伝え、最後に、「こんな気炎を吐くのも木曜日に君を話させ様と思うからさ。又来る時は大に弁じ玉え忙しいから是で御免を蒙る<sup>(33)</sup>」と結んでいる。

この次に小宮が夏目より受けた書簡は、十一月二十五日付けのものである。

「風邪をひいても僕の講義文出席してくれる杯は甚だ有難い。元来僕の講義はそんなに面白い筈はないのだから風邪をひいたらゆっくり葛湯でも呑んで寝ているがいい。僕がや

すんだのは病気じゃない。去ればと云って君が病気だから夫に対して休んだ訳でもない。只やすんだのさ。霊の感応で僕がやすむなんて事があるものか。左程に僕を信仰してくれるのは有難いが君がそんな傾向を発達させると飛んでもない事になるよ。<sup>(34)</sup>」これによると、小宮は、独文科の学生でありながら、英文科の学生と共に講義（十八世紀英文学）を風邪をおして出席する程、夏目に対して強い敬慕の念を抱いていたことがわかる。しかも、夏目の休講を風邪をひいている自分の霊に感応した結果と解釈して、その気持を書き送ったという事実が確認される。ここに表れている小宮の夏目へ向けられた思慕の念はあたかも異性に向けられるそれにも似ている。そこを懸念して、夏目はつづいて「以来は決して霊の感応を擔いじゃいけない。<sup>(35)</sup>」とたしなめている。もちろん、夏目の忠告は、小宮からの一方的思慕を嫌悪する心理から発せられたものではなく、逆にそこまで自分に対して関心を抱く人間が存在することに喜びをさえ感じていたのではないかと推測される。とに角、この年の七月十一日付けの第一信を夏目より受けてから四ヶ月余りを経たに過ぎないこの第五信の段階で、小宮と夏目の師弟関係の深化は進行しているのである。

この書簡を夏目は次のように結んでいる。「君はあまり神経質だから今のうちにもう少し呑気になって置き給え。今のうちに呑気になるのは訳はない。僕がして上げるから毎木曜に必ず出勤し玉え<sup>(36)</sup>」。

第六信は、前便とは異なり、全く事務的な内容で、本の登録について小宮が動いたことに対する礼状である。但し、これによって、小宮が夏目の日常における事務的の用件などに奉仕的に活動していたことが分かる。第七信は、十二月二十二日付けで発信されている。冒頭は次のように始まる。「君は長い手紙をかいたね。漸くホトトギスを済ましたから今日は用事其他の手紙をかく是が六本目である。手紙も六本位かくと疲れる。<sup>(37)</sup>」ここにある「ホトトギスを済ました」は翌年一月、「ホトトギス」に発表された『野分』の原稿を指すと思われる。十二月十六日付けで高浜清へ宛てたハガキに「表題ハ実ハキマラズ「野分」、位ナ所ガヨカロウト思イマス<sup>(38)</sup>」とあるからである。

さて、この日も夏目は手紙を六本も書いている。長さにもよるが六本も書くと、本人も言うように疲れるであろう。普通、手紙は疲れるまで書くものではない。好きだから書くということが夏目のばあい該当するとも考えられるが、来信に対して返信をするという義務感が働いたことも争えない。小宮の長文の書簡に対して、夏日も長文の返信を認めたのがこの第七信である。その中間部分に次のくだりがある。「僕をおとっさんにするのは、が、そんな大きなむす子があると思うと落ち付いて騒げない。僕は是でも青年だぜ。中々若い、んだからおとっさんには向かない。兄さんにも向かない。矢っ張り先生にして友達なるものだね。<sup>(39)</sup>」第五信で霊の感応を持ち出し、異性に対するような慕情を寄せる小宮をたしなめた夏目は、この第七信では父性に対する慕情に似たものを寄せる小宮に対して、当惑し、照れを隠す言葉を連ねている。「僕は是でも青年だぜ。」は当時三十九歳に達していた夏目が使うには不似合な言葉である。いわゆる照れ隠しというべきものである。したがって、「先生にして友達なるもの」が適当な位置づけになるわけである。夏目も知るごとく、小宮は早く父を失い、女手によって育てられた。その小宮が夏目に父性を感じ、父親を求めたのは自然である。それを知りつゝ照れる心性が夏目にはあるということである。したがって、第五信のばあいもそうであったように、夏目は小宮の思慕を拒絶してい

るのではなく、むしろ受容していると言ってよい。夏目の手紙はつづく。「君の手紙を見て思い出した。今度僕のかいた小説（注、先にあげた野分であろう。）をよんで御覧。あれは天下の心細がってるものによませようと思って書いたものだ。あれを読んでどんな感じが起るか聞きたいと思う。<sup>(40)</sup>」この後、人に身の上を打ちあけるのは人間が純粹であるからであること。ただし、自分の事を誇張することがあることなど所感を述べた上で、「つまらん事をかいて長くなった。是から一寸昼寝でもしようと思う。なんだかだるくていけない。<sup>(41)</sup>」と結んでいる。小宮が自分の身の上を打ちあげ、夏目に父親がわりになって欲しい旨を訴えたのをこのような形で受けとめ、しかも肩の力を抜いた調子で締めくくっている。夏目の心はこの段階で完全に小宮に対して開かれていると言っていい。

この後、二十七日付で夏目は高浜清に宛てて、「廿七日引き越します／所は本郷西片町十ノ七であります。中々まづい処です。<sup>(42)</sup>」と引越しの予告をしている。この引越しについては、夏目夫人が詳しく語っている<sup>(43)</sup>。夫人によれば、引越しは十二月二十八日に行われた。家賃は二十七日である。小宮はこの時、鈴木、野村（伝四）、野間、野上（豊一郎）らと手伝いに赴いている。翌日も小宮は引越先へ行き、鈴木と共に障子の張りかえをすべて行方。夫人はその礼に5円ずつ渡したという<sup>(44)</sup>。翌年、小宮は、明治四十年二月十日付けの第八信<sup>(45)</sup>を夏目より受け取る。本郷区駒込西片町1037より本郷区森川町一小吉館に宛てたものである。書面は、九日に朝太夫の義太夫を聴いた途次、寄ったが留守であったことを知らせたものである。

第九信は、三月四日付けのはがきで次の文面である。「白酒をのみに来ててもよろしく候。漱石山房の印をベタベタ押したいが時々来て五六冊づつ押して被下度候。其代り時々御馳走を致候 以上頓首恐惶謹言<sup>(46)</sup>」三月の節句の時期に蔵書印が何かを押しに来てくれ、と頼んだもので、最後の「頓首恐惶謹言」は明らかに夏目独特の遊びで、このような文字を用いる程の用件ではない。こゝにも夏目の小宮に示す親密の情がうかがわれる。

第十信は、夏目が教師の身分で出した最後の書簡で、三月三十一日付けになっている。京都市外下加茂村24狩野亭吉内より本郷西片町1037夏目内小宮豊隆に宛てたものである。内容は次の通りである。

「京都は寒く候加茂の社は猶寒く候糺の森のなかに寝る人は夢迄寒く候／春寒く社頭に鶴を夢みけり／高野川鴨川共に磧のみに候／布さらず磧わたるや春の風／詩仙堂は妙な所に候。銀閣寺の砂など乙なものに候。知恩院はよき所に候。妬園の公園は俗に候。／清水も俗に候／見る所は多く候／時は足らず候／便通は無之候／胃は痛み候／以上／三月三十一日 金<sup>(47)</sup>」

この書簡を小宮に送った時、夏目は既に東京帝国大学文科大学と第一高等学校に辞表を提出していた。それは、この年二月より本格的に始まった朝日新聞社による夏目招聘の議がいよいよ熟し、当時東京朝日新聞主事の池邊三山が三月十五日に西片町の夏目宅を訪問し、懇望したことにより、朝日新聞入社を決意した直後のことである。夏目が文科大学に三月二十五日に提出した解囑願の文面は次のようになっている。「小生儀今般一身上の都合により文科大学講師の解囑を希望致候につき可然御取計相成度候也<sup>(48)</sup>」この願書は事務局より一部訂正を指示された上で受理された。

夏目が京都に当時京都帝国大学文科大学長の職にあった学生時代からの親友狩野亭吉を

訪ねて東京を発ったのは、三月二十八日のことである。そして、二週間余り滞在の後、四月十二朝、東京に帰って来る。<sup>(49)</sup>

ところで、小宮へ宛てた書簡が旅行先の京都から出されていること、小宮の住所が夏目の住所になって居ることから推察すると、夏目が京都に旅行すること、その旅行の主目的が狩野亨吉に会い、京都帝国大学文科大学への招聘を辞退したことを謝すること、そればかりか東京帝国大学をも辞職して、東京朝日新聞に入社することなどを書面だけでなく、面会して伝えることなどにあることを予め小宮は夏目から聞かされていたものと思われる。とくに、大学を辞職することについては、すでに三月二十三日の日付けで、夏目は、門下生ではあっても小宮程には夏目に近い野上豊一郎へ宛てて、自分が大学を辞職することを知って驚いて書簡を送って来たことに対する謝辞とそこに至る経緯、所感を比較的長文の書簡を送っている<sup>(50)</sup>からである。しかも、そこにも京都へ行き狩野亨吉に会うことが記されていることによって小宮は野上より早い時点でこのことを夏目より知らされていたと考えられるのである。

以上見て来たとおり、夏目金之助が教師という立場で小宮に接したのは、明治三十八年九月が最初で、以後明治四十年三月に夏目が大学と高等学校に辞職願を提出まで、約一年半の比較的短い年月であった。

## 結 言

夏目金之助とその門下生を代表する位置にある小宮豊隆の師弟関係の発生とその展開を夏目自身の書き遺した小宮豊隆へ宛てた書簡と小宮の著した夏目と自身との関わりを記した著作を中心にして、夏目が教師として活躍した時期に限定して検証した結果、次の点が明らかになった。

まず、夏目と小宮の師弟関係の発生が明治三十九年の九月で、他の門下生と比較すると遅いという事実。そして、その理由は、小宮が、夏目の専攻する英文科に籍を置かず、独文科に籍を置いたことによること。

次に、小宮が森田草平、鈴木三重吉等の門下生を代表する者の中で最年少であったことと、母親によって育てられた生長歴から夏目に父性を求めるという特性があったこと。

更に、小宮は急速に夏目に接近し、私淑する形で夏目の精神世界と現実生活の中に身を置くかのように自身を捧げて行ったこと。

そして、その結果、小宮は夏目の最も忠実で真摯な理解者、崇拜者となり、それは代表的著作であり、夏目漱石の評伝としては古典として評価される『夏目漱石』として結実した。

### (注)

1. 小宮豊隆、漱石襟記、小密書店、昭和十六年、273-4ページ。
2. 小宮豊隆、夏目漱石、岩波書店、昭和二十四年、415ページ。
3. 夏目漱石、日記、漱石全集第二十四巻所収、岩波書店、1979年、56-57ページ。
4. 小宮豊隆、夏目漱石（前掲）、415ページ。
5. 夏目漱石、自転車日記、漱石全集第十二巻所収、岩波書店、1979年、57-68ページ。



6. 小宮豊隆, 漱石襟記 (前掲), 274ページ。
7. 同前書, 274ページ。
8. 後に『文学評論』として刊行され, アディスン, スティル, スウィフト, ボオブ, デイフォの5人を論じている。
9. 相原和邦, 小宮豊隆, 夏目漱石事典・別冊国文学No.39所収, 学燈社, 平成二年, 268ページ。
10. 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第二十八卷所収, 岩波書店, 1980年, 64ページ。
11. 同前書, 64ページ。
12. 同前書, 64ページ。
13. 小宮豊隆, 漱石の芸術, 岩波書店, 昭和十七年, 507ページ。
14. 同前書, 508ページ。
15. 同前書, 508ページ。
16. 井上百合子, 夏目漱石年譜, 文芸読本夏目漱石所収, 河出書房新社, 昭和五十年, 313ページ。
17. 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第二十八卷 (前掲), 75ページ。
18. 小宮豊隆, 注解, 漱石全集第二十八卷 (前掲), 288ページ。
19. 夏目漱石, 草枕, 漱石全集第四卷所収, 岩波書店, 1979年, 126ページ。
20. 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第二十八卷 (前掲) 所収, 79-80ページ。
21. 井上百合子, 夏目漱石年譜 (前掲), 313-4ページ。
22. 夏目鏡子述, 漱石の思い出, 文芸春秋, 1994年, 180-181ページ。
23. 夏目漱石, 文学論, 漱石全集第十八卷所収, 岩波書店, 1979年, 12ページ。
24. 夏目漱石, 書簡, 第二十八卷 (前掲), 96-97ページ。
25. 夏目鏡子述, 漱石の思い出 (前掲), 177ページ。
26. 小宮豊隆, 夏目漱石 (前掲), 494ページ。
27. 同前書, 494ページ。
28. 夏目漱石, 書簡, 第二十八卷 (前掲), 129ページ。
29. 同前書, 129ページ。
30. 同前書, 129ページ。
31. 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第二十七卷, 岩波書店, 1980年, 239ページ。
32. 森田草平, 続夏目漱石, 甲鳥書林, 昭和十八年, 256ページ。
33. 夏目漱石, 書簡, 第二十八卷 (前掲) 所収, 129-130ページ。
34. 夏目漱石, 書簡, 第二十八卷 (前掲) 所収, 140ページ。
35. 同前書, 140ページ。
36. 同前書, 140ページ。
37. 同前書, 152ページ。
38. 同前書, 151ページ。
39. 同前書, 153ページ。
40. 同前書, 153ページ。
41. 同前書, 154ページ。

42. 同前書, 155ページ。
43. 夏目鏡子述, 漱石の思い出 (前掲), 182-185ページ。
44. 同前書, 184ページ。
45. 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第二十八卷 (前掲) 所収, 171ページ。
46. 同前書, 175ページ。
47. 同前書, 181ページ。
48. 小宮豊隆, 夏目漱石 (前掲), 561ページ。
49. 同前書, 564-569ページ。
50. 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第二十八卷 (前掲) 所収, 178-179ページ。

※引用文中の旧漢字, 旧仮名遣いはすべて新漢字, 新仮名遣いに改めたことをことわっておく。